芸文だより

第41号

令和６年３月15日

村山市芸術文化協議会

題字／齋藤　湖舟

大盛況のSKIPスーパーライブ

未来ある子供たちを応援しよう

村山市芸術文化協議会会長　伊藤大藏

今年も市の芸術祭が十月十八日から十二月十日にかけて村山市民会館を中心に行われました。多くの方々に足を運んでいただき感謝申し上げます。

その中で、大人の作品や活動に混ざって、子供たちの姿があり、目をひきました。

一つは、子供の生け花教室の作品、そして書の色紙展、更に絵画こども県展などでした。いずれも、屈託のない子供らしい堂々とした作品で、思わず微笑んでしまいました。

また、芸術祭から少し離れますが、県のトップレベルを長年守っている楯岡小学校合唱部のクリスマスコンサートが市民会館で行われました。温かい雰囲気に包まれ、洗練された素晴らしい演奏に感動しました。今年は、全国的に進められている「地域指導者に移行」する過渡期にあり、いろいろ不安もあったと思いますが、地域の協力体制が素晴らしく、その不安を見事に吹き飛ばしてくれました。

楯小合唱部クリスマスコンサート

もう一つ感心したことは、市小学校合同で長く行われてきた「音楽発表会」が「文化交流会」と名称を変えて実施されたことです。合唱や合奏をするには少人数過ぎる三校が、伝統芸能の大黒舞や和太鼓、そして子供たちに人気のダンスで見事に芸術性を表現してくれました。そのアイディアと頑張りに拍手を送ります。

次世代育成を活動の一つに掲げる芸文協活動も子供たちの意気込みで、将来が楽しみになりました。

劇団赤ひげ、お陰様で還暦です

劇団赤ひげ　吉田峻太朗

劇団赤ひげは今年で創立六十周年の節目を迎えました。ここまで劇団が存続できたのも、活動に情熱を注ぎ続けてきた歴代の劇団代表をはじめとする多くの劇団員や関係者各位、そして長年支えてきてくださった地域の皆様方、これまでご観劇いただいた多くのお客様のおかげです。この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。

本稿の執筆にあたり、劇団の歴史について辿ってみると、多くの挑戦を積み重ね、地域劇団として根付いてきた軌跡を見ることができました。人間でいえば還暦を迎えた訳ですから、改めて六十年という歴史の重みを感じます。

50周年記念公演「お倉物語」

劇団赤ひげは、昭和三十八年（一九六三）に前身であるドラマグループ土として村山市で産声を上げ、劇団土、劇団赤ひげと改名を重ねながら、定期公演のほか、学校公演や子ども劇場などにも挑戦していきました。平成二年（一九九〇）には、地域の伝説や地域作家の作品に演劇的光を当てようという試みである「地域劇団宣言」を行い、より地域に根差した舞台制作に取り組みます。大倉地域の「お倉伝説」を題材とした『お倉物語』を皮切りに、『碁点の月』や『芭蕉と尾花沢と子どもたち』といった作品に次々と上演し、地域劇団としての活動が最も輝いていた時期かもしれません。平成二十五年（二〇一三）の五十周年公演では満を持して『お倉物語』を再演し、多くの感動を呼びました。

その後は、『ファミレスのババロア』『ちゃぶ台の詩』『再、恋、夜。』『夏空の光』『レンタルファミリー』『星降る夜の彼方には』『STRAW HATs』とジャンルを問わず様々な作品に挑戦してきました。近年の舞台をご覧になられた方で、印象に残っている作品はございますでしょうか。コロナ禍で公演そのものが危ぶまれたこともありましたが、感染対策を考慮した「朗読劇」という形で公演にこぎ着け、何とか一年一作品のペースで舞台を作り続けることができています。

コロナ禍の中の朗読劇「星降る夜のかなたには」

そして六十年を迎える今年、上演作品として選んだ脚本は『ホーム49症候群』という作品です。昨年度まで劇団代表及び演出家としてご尽力くださった鈴木正弘氏が勇退され、新体制で臨んだ初の舞台となりました。（もっとも、本番一週間前からは舞台設営や演出面において、ガッツリとご助力いただいた訳ですが）

ついに60年！記念公演「ホーム49症候群」

この物語の中心は空き巣に入った若者と成仏直前の幽霊のお婆さん。二人が遭遇したことをきっかけに、登場人物の悩みや嘘・葛藤が次々と連鎖していくコミカルなストーリーは、老若男女問わず多くの方に受け入れてもらえた作品だったのではないかと思います。終演後のアンケートでは「ここ十年で最高の出来」という光栄なお言葉をはじめ、今後の励みとなる多くのご感想を頂戴しました。演者としては「あそこはもう少しやれたんじゃないか」といった反省の弁がどうしても出てきてしまう訳ですが、六十周年を飾るに相応しい舞台になったのではないかと個人的には感じています。

次の10年に向けての一致団結

さて、これからの劇団赤ひげがどのようになっていくかは、正直さっぱりわかりません。わかりませんが、「面白い舞台を創りたい」という劇団員の想いと、舞台を観ていただけるお客様がいる限り活動は続くでしょう。いや、そうなるような舞台を創れるように挑戦しつづけなければなりません。願わくば十年先、二十年先も、先輩たちが歴史を積み重ねてきた村山の地で、演劇の火を灯し続けられるように。

「第30回村山市大正琴記念演奏会」を終えて思うこと

村山市大正琴連盟　日野　桐華

本ベル後『故郷』の曲が流れ幕が上がる、演奏会の始まりです。今回は記念演奏会ということで、私達の思いを表現しました。テーマは『故郷村山市へのリスペクト』。

一曲目の、『故郷』から始まり、『古城』『リンゴの唄』『青い山脈』は、地元戸沢地区の歴史と緑豊かな風景を、そして『バラが咲いた』『栄光の架橋』は、東京五輪で新体操団体金メダルへと輝いたブルガリア選手団を、ホストタウンとして支えた村山市への賛歌、『瑠璃色の地球』『野ばら』へと続く曲は、ピースフルネスへの思い祈り、私達にできる精一杯の思いを込めた演奏会となりました。

本会は、昭和六十二年村山市戸沢地区から大正琴の音色が響き、大きな人の輪が生まれていきました。

初代会長の故 笹原はる氏をはじめ、現会長の井澤セイ氏まで五人の会長がこの会をまとめて下さいました。心からの感謝と共に厚く御礼申し上げます。

しかし歩みの中で令和二年、さすがに迷いました。開催するか否か、と。

感染対策を会場側や関係各位で協議し、コロナ禍の中、心の栄養として大正琴音楽が、何かの「きっかけ」になればと取り組みました。来場者の方より「良かったよ、今はコロナで何でも中止、気持ちが明るくなれた」と声を頂いた時は、とても嬉しく思ったことを覚えております。

私達は、第一回演奏会より（琴城流）と（琴伝流）の二派が合同で開催という形式で行って参りました。しかし、令和二年で琴城流の方が退会され大変残念に思いました。

「継続は力なり」

続けることは容易ではありません、が、一つ一つの積み重ねがいずれ大きな成果へとつながると信じています。これからも様々な場面で、諸先輩、皆様方と大正琴音楽を通して「ウェルビーイング」でありたいと思っております。

市民会館に大正琴の音色が響く記念演奏会

公演後の記念撮影

バリアフリーのびのび文化教室

市子育て支援課と芸文協の共催事業「バリアフリーのびのび文化教室」は障がいを持つ子どもたちが、文化体験を通して生涯の趣味を見つけるきっかけ作りを目的にした事業です。昨年度ご好評により、今年度も開催となりました。二年目は書道と和楽器の二つの講座を開講しました。

書道教室では市書道会会員の指導のもと筆で自分の好きな言葉を書くことに挑戦。参加者は和紙に練習した後、一番気に入ったものを色紙に清書しました。完成した作品は芸術祭のこどもの書の色紙展で展示しました。

和楽器教室では三味線民謡正徳会と杉島諏訪太鼓保存会の会員が講師を務め、参加者は三味線と和太鼓の二種類の和楽器を体験しました。どちらも講師の演奏を聴いた後に講師の指導を受けながら三味線や和太鼓、どらなどの演奏に挑戦しました。

芸文協では未来に繋がる芸術文化振興の取組みとして、来年度も引き続き実施する予定です。今後の活動を是非ご注目ください。

自分の好きな言葉を半紙に書く

三味線の指導に集中する参加者

和太鼓の合奏に挑戦！

第59回 村山市芸術祭

会期　令和五年十月十八日～十二月十日

第五十九回村山市芸術祭は、十月十八日の「県美展・こども県展　村山巡回展」を皮切りに、十二月十日の「ブルガリアピアノリサイタル」までの約二か月、村山市民会館を主会場に開催されました。趣向をこらしたステージや展示に訪れたお客様は、思い思いに芸術の秋を満喫していました。

21年目、北村山吹奏楽団「秋のコンサート」

ハーモニーで魅せるフェブリエ「プロムナード・コンサート」

厚岸映像集団「光風」との合同写真展

各々の力作を展示した書道展

開幕！津軽三味線民謡舞踊フェスティバル

書の色紙展では子どもたちの作品も展示

各人の個性と技の光るさつき盆栽展

芸術祭の最後の公演 ブルガリアピアノリサイタル

手芸作品展 大盛況の体験コーナー

迫力のステージ！杉島諏訪太鼓保存会

大歓声の終幕 からす笑劇場「たそがれのマジシャン」

朗々と響く吟友会吟詠大会

「生け花」を愉しむ

村山市華道連盟　阿相良子

第五十九回村山市芸術祭に於ける華道連盟の華展が十月二十八日から二日間にわたり開催されました。村山市華道連盟は、池坊、小原流、草月流、龍生派、華道栖草流の五流派の出展となっています。今回は、大会議室を会場として展示いたしました。

大作を含め三十三作品と子ども生け花教室の九作品が並びました。五流派の個性が光る華展を鑑賞できるのは、この芸術祭ならではの醍醐味と思われます。各流派の技巧の違いを、草花の持つ美しさや枝葉の美しさを通して自然や生命力を多種多様な花材で表現されていました。

来場し一点一点じっくり鑑賞していた方から感想をいただきました。「子どもたちの生け花は、明るくて楽しい気持ちになりますね、皆さん上手ですね」と、言っていただきました。自由に楽しく花を生ける体験を通して、子どもたちには、今後も生け花に興味と関心を持ち続けて欲しいと思いました。市内の小学生の皆さんの参加が今後増え、伝承文化の継承につながっていってほしいと思います。

さて、市民会館玄関の大作を今回は華道栖草流の先生方が担当いたしました。華道連盟では、五流派が当番で玄関の大作に力を注いでいます。芸術祭の成功を願って心を込めて生けております。来年度は、小原流が担当の予定です。玄関の大作も合わせてご覧いただければ幸いです。

芸術祭の幕開けを飾る玄関の大作

和の音色をもとめて

村山三曲協会　大原由貴

村山三曲協会は留場光山先生主催の光山会が母体となり、昭和六十三年秋に発足しました。光山会は尺八の会で箏の社中との合奏などを行ってきました。

今年はコロナが五類になって少し落ちついた状況での公演となり、例年通りに午前中にリハーサルを行い、午後から演奏会を開催しました。曲の出来については、例年の練習よりも時間をかけて、特に全体練習を増やすなど、全体としてまとまりのある演奏が出来たと思っています。

例年の課題であるお客様の増員については、色々と手を打ってみたものの成果が出なかったようです。今後は他の団体からの情報収集等を積極的に行い、さらに曲目も皆様に楽しんで頂けるようなものも取り入れたりしながら、お客様の増員をはかり、より多くの方にお越しいただきたいと思います。

公演の幕開けを飾る三曲の音色

難波津

村山市謡曲連盟　品川晶兒

今年の芸術祭は、コロナ禍の影響を受け四年ぶりの発表会でした。取り掛かりにおいてもなかなか上手くゆかず稽古の回数を増やして何とか対応しました。当連盟もメンバーの高齢化が進み正座もままならないところですが、できる限り継続してまいりたいと思っております。

今回の演目は、「難波（初番目物・春）」と「三輪（四番目物・秋）」でした。

「難波」は、熊野詣から都へ帰る途中の臣下が難波の里で、梅の木陰を清めてゐる老人と若者に尋ねると、「とにもかくにも津の国の、こや都路の難波津に、名を得て咲くや、木の花を、名木かとのお尋ねは」と始まり…梅は、百花の魁をなす花で王仁の詠歌「難波津に、咲くや木の花冬籠り、今は春辺と、咲くや木の花」によって有名な存在となったこと、また王仁と仁徳天皇の関わりを舞や舞楽を奏して語り・讃えるものとなっています。

この王仁の和歌「難波津」は、競技百人一首の「序歌（百首のいずれにも属さない特別の枠の歌）」として、競技のはじめに詠まれます。

四年ぶりに響く謡曲の調べ

芸術文化功労者を表彰

村山市芸術祭開幕式の席上、令和５年度芸術文化功労者が表彰されました。誠におめでとうございます。
（10月27日市民会館）

【功労章】
板垣　雅一（西郷・美術連盟）
青柳　忠夫（楯岡・エッセイクラブ）

【栄光章】
菅野　拓也（楯岡）
＝第37回障害者による書道・写真全国コンテスト金賞（最高賞）
松田　律子（楯岡・書道会）
＝第48回県総合書道展　山形市長賞
佐藤　黎花（大久保・書道会）
＝第48回県総合書道展　市議会議長賞

【感謝状】
赤石　　弘（楯岡・社会音楽連盟）
黒沼　強志（楯岡・社会音楽連盟）
田村　武之（冨本・フォトクラブ）
工藤　和典（楯岡・杉島諏訪太鼓保存会）

百年の先へ

村山市茶道連盟　佐藤　隆一

村山市茶道連盟は今年で設立以来四十五年目を迎えることができました。これも偏えに多くの皆様のご支援・ご協力の賜物と心より感謝いたしております。一時期感染症禍で休会を余儀なくされておりましたが、状況の落ち着きもあることから昨年より徐々に門戸を広くし、お茶席をほぼ本来の形で春、秋、そして芸術祭茶会を開催してまいりました。今年の芸術祭茶会につきましては、十一月三日の文化の日ということもあり、またお天気にも恵まれ近隣市町はもとより遠く山形市方面からもお客様にお越しいただき盛会にお茶会を持つことができました。

そもそも茶道とは、客に抹茶を点て、どうしたらおいしく飲んでいただき、喜ろこんでもらえるのかを考えてできたふるまいのことであります。もともと大陸から伝わった茶を飲む習慣を長い時間をかけて、日本の気候や風土、日本人の性格に合った形に整えた日本の誇れる文化で、もてなすため専用の空間「茶室」を作ったのが茶道文化として継承されてきたわけです。ただ抹茶と菓子をいただくだけでなく、その時間が豊かになるように季節に合った部屋の飾り付けや、抹茶の準備の仕方、料理の内容や使う器などすべてに心を配った心づかいは「おもてなし」として長く続いてきたものです。

私どもこの道に係わる者として今後とも斯業のさらなる繁栄と継承に現在市内五流派会員一同努めてまいりたいと思っております。

初燕　茶席の窓辺掠めけり

コロナ禍以前のように開催された茶会

日常に「美術」を

村山市美術連盟　菅井　一之

コロナが五類になり日常が帰ってきました。美術連盟も今年度から会議等を行い、直接顔を合わせて懇親を深めることの重要性を再認識したところです。

美術連盟は本年度、六月に最上川美術館で「美術連盟小品展」を行い、二十七点を展示しました。小品ながら各自の個性が発揮され、しっとりとした豊かな展覧会になったと思います。

また十月には県美展巡回展の展示作業への協力を行っています。美術連盟の作品も多数出品される公募展です。全体のレベルも高く、多くの個性的な作品を鑑賞できて、とても勉強になりました。

十月末には村山市芸術祭で「美術展」を開催。会員の作品三十六点、一般の方の作品二点の計三十八点、水彩画・油彩画・デザイン等と多彩な作品を展示しました。また、美術連盟の大先輩である故 広田和平氏の作品を四点展示いたしました。

美術連盟には今年度二名の若手新入会員がありました。二人からは新たに木版画と抽象画の出品があり、会に新風を吹き込んでいただきました。良い刺激をいただき、ますます活発な活動ができると喜んでいます。

残念なことに災害や事件が多発しています。まず命を守ることが一番大切ですが、同時に文化体験は心を育む上で必要だと思います。美術等の活動がますます盛んになり、豊かでゆとりのある生き方を志す人が増えることを願い、微力ながらその一助になれるようこれからも活動していきたいと思います。

新規会員と広田和平氏の作品も並んだ美術展

令和四年度県民芸術祭 奨励賞をいただいて

昨年、村山市華道連盟のいけばな展が令和四年度県民芸術祭の奨励賞を頂きました。山形県芸術祭に参加して日が浅かったので、奨励賞を目指し良質ないけばな出品と会場構成に心を砕いておりました。奨励賞受賞のお知らせを頂いた時、「この調子で、今後も頑張っていけばな展を開催していきなさい」と県芸文よりお墨付きを賜ったように感じました。

コロナ禍をへていけばな展を開催できることは幸せなことなのだと思っております。その上、県芸文協より評価して頂いたのですから、村山市華道連盟の会員はこれからも、いけばなの鍛錬をしていく覚悟です。そして村山市芸術祭いけばな展では一年間の研鑽の成果を発揮したいと思っております。ご支援、ご高覧下さいますようお願い申し上げます。

（村山市華道連盟　大場ひろみ）

想い出の人　故広田和平　さん

愛すべき画家、広田和平氏は、昭和四年飛騨高山の生まれときく。亡くなって十年ほどたつが、このたび遺族から作品が市に寄贈され芸術祭美術展で披露された。

久しぶりに再会でき往時を思い起こした。楯岡五日町で飲食店を開業されていたので絵描き仲間の常宿として何かにつけよく集まった。時おり店主の爆弾が落ちる。遠慮会釈もない作品批評が飛び出す。信念を真っ直ぐに持ち続けた少年のような男。そしてまた当地に新風を吹き込んでくれた人として大いに賞賛したい。

氏は平成元年から六年間、市美連の会長を務められ、県民芸術祭で受賞するなど実績をあげている。日展、安井賞展などでも活躍された。

作品づくりには研究熱心で色々な方法で考案し、余す事なく教示してくれた。

今もうなぎの味とともに笑い顔や岐阜訛りが思い出されて懐かしい。

（村山市美術連盟　原田一裕）

広田和平氏 代表作「春遠し」

令和五年度 村山市芸文協のうごき

- 4・13　会計監査委
- 4・18　三役幹事会
- 4・24　理事会
- 5・12　県芸文協常任理事会
- 5・17　総会
- 5・27　山形交響楽団　ユアタウンコンサート村山公演（後援）
- 5・27　県芸文協会総会
- 6・22　三役幹事会
- 7・27　市町村芸術文化団体会長会議
- 8・31　三役幹事会
- 10・3　芸術文化功労者選考委員会
- 10・18　県美展こども県展村山巡回展
- 10・27　村山市芸術祭開幕式・功労者表彰式
- 10・28　バリアフリーのびのび文化教室（書道）
- 11・4　バリアフリーのびのび文化教室（和楽器）
- 12・7　三役幹事会
- 12・18　北村山地区芸文協地域懇談会
- 12・19　芸文だより編集委員会
- 1・30　芸文だより編集委員会
- 2・26　理事会

あとがき

今年は新型コロナも少し落ち着いて各団体は通常の芸術祭活動が出来たのではないでしょうか、とても喜ばしいことです。通常・平常とはなんとありがたいことかと思わずにはいられません。

村山市芸文協加盟の団体・個人のこれまでの多大なご尽力に感謝します。そして、これからの益々のご発展を祈念し芸術の香り高い故郷を大切にしていきましょう。

（編集委員長　大原由貴）

芸文だより編集委員

大原由貴（村山三曲協会）
佐藤隆一（村山市茶道連盟）
阿相良子（村山市華道連盟）
品川晶兒（村山市謡曲連盟）
工藤英喜（村山市美術連盟）